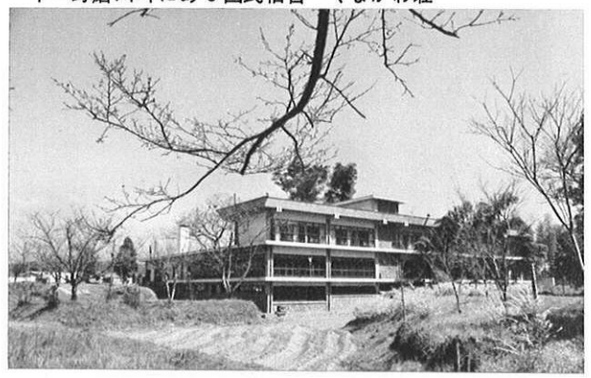
カメラスケッチ

球磨ところどころ

下・球磨川畔にある国民宿舎“くまがわ荘”



下・球磨地方では随所で球磨焼酎つくりが……。

上・名物の人吉春の市にはキジ馬が軒先にいっぱい

下・人吉・球磨地方に古くから伝わる臼太鼓踊り

＜ここに人あり＞

山の看護婦さん

★多良木町槻木　川村ミサオさん

多良木公立病院槻木診療所は、多良木町から更に南へ一二㌔、塚山峠という急激な山坂を越え切った草深い谷間の部落にある。標高五〇〇㍍。部落の入口まで通っているバスも一日二往復。それも天気のよい日に限り、雨や雪が降りしきると申し分なく欠行してしまう。部落の人たちも、よほどのことがないことには町に出ることもない。三〇〇に近い山里の家々は、山ひだの陰や谷間のほとりに見えかくれして、診療所のある付近だけが、辛うじて小さな集落をなしているのである。

職場と家庭の間で

川村ミサオさんがこの部落の診療所に赴任してそろそろ一年になる。昭和十四年、多良木病院を振り出しに郷里水上村の診療所、市房ダム建設診療所、古屋診療所（水上村）と、自分から希望して辺地勤務を転々するうちに二十八年間が過ぎてしまった。〃もともとわたしには看護婦という職業が性に合ってるんですねえ。わたしにできることといえばこれだけですから……〃古屋敷診療所では八年間だった。夫や子どもたちとの別居も止むを得なかった。それも川村さんに言わせれば〃夫や子どもたちがわたしの仕事を誇りにしてくれるし、信じているのです。そんなことよりも、困っている部落の人たちのことばかりが気になってねえ〃犠牲などという甘い響きを殆んど感じさせないのが不思議。槻木診療所への転任が決ったとき、川村さんの留任を懇請する声も少くなかった。

〃診療所のオバさん〃

診療所には、川村さんのほかに事務職員兼ジープ運転手の黒木さんがいる。週の木曜日から金曜日にかけては定期診療の日。この日は本院から先生が出かけてくる。黒木さんのハンドルさばきも巧みにジープは急な山路を縫うように走ってゆく。診療所から一番近いコースでも四㌔は軽い方だ。ジープから降りてからがまた一苦労だ。谷川を渡り、更に山あいの小径をせっせと歩く。巡回診療の合間には、薬の配達やら医療扶助の手続きの相談やら川村さんたちはくたくたになる。山林労務者の多いこの地区では高血圧の患者が目立つ。過労、塩分の摂取過剰などが大きな原因らしい。こんな人たちがジープのくる日を首を長くして待っている。

診療所の不意の客といえば、山作業のケガ人か出産の駈け込み訴えだ。そんな時ベテランの川村さんはあわてない。応急措置で大半は済ませるが重患は直ぐ本院へ手配。ただし助産婦の資格をもつ川村さんは分娩の措置についてはそれこそお手のものなのである。そのほか洗眼、投薬、それにまだある、電話の取り継ぎだ。診療所にかかってくる電話には必ずといっていいほどついでの用事というブレミヤがつく。部落の人たちも何かあると診療所が連絡場所。いわば広場なのだ。広場といえば子どもたちや老人がよく遊びにくる。中には薬の空箱が欲しくて、わざわざ洗眼にくるチャッカリ型の子もいる。〃診療所のオバさん〃は子どもたちの人気の的でもある。

〃たばた家族の〃哀歓

月に二回の診療所の休日には、待ちかねたように、人吉から次女の高校三年生が山を越えてくる。日ねもす寝転んだり、テレビを見たり。そして母子はとめどもなく一夜を語り明かすことになる。川村さんのご主人はN建設の技師さんだ。天草架橋の仕事も終って、現在は下筌ダムの工事に取り組んでいる。〃長女がこの春、大阪府立の高等看護学園へ入りましたが、これは全く本人の意思で決ったものです。わたしにはそれが本当に嬉しくってねえ〃親子四人がそろうのは盆か正月ぐらいという川村さん一家。川村さんは毎日の忙しい職務の中にあって、さらに母親としての自覚ときびしさを確めるのである。

★診療所は子どもたちの広場にもなる。そして川本さんは大の子ども好きだ。